霊宝館だより

題字・畠野光義師

霊宝館だより　第125号
平成30年2月20日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736―56―2029
URL http://www.reihokan.or.jp

重文 上杉謙信霊屋　屋根
一定の幅に切りそろえたヒノキの皮を、竹の釘で打ち付けて重ねていく伝統的な檜皮葺（ひわだぶき）の技法です。

利用案内

開館時間
■11月1日～4月30日　8時30分～17時00分
■5月1日～10月31日　8時30分～17時30分
■休館日　年末年始のみ

■拝観料　大人　600円
高・大学生　350円
小・中学生　250円
高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。
■専用駐車場あり

平常展
「密教の美術」
～霊宝館収蔵宝物お蔵出し！～

開催中～4月8日（日）まで

第125号　目次

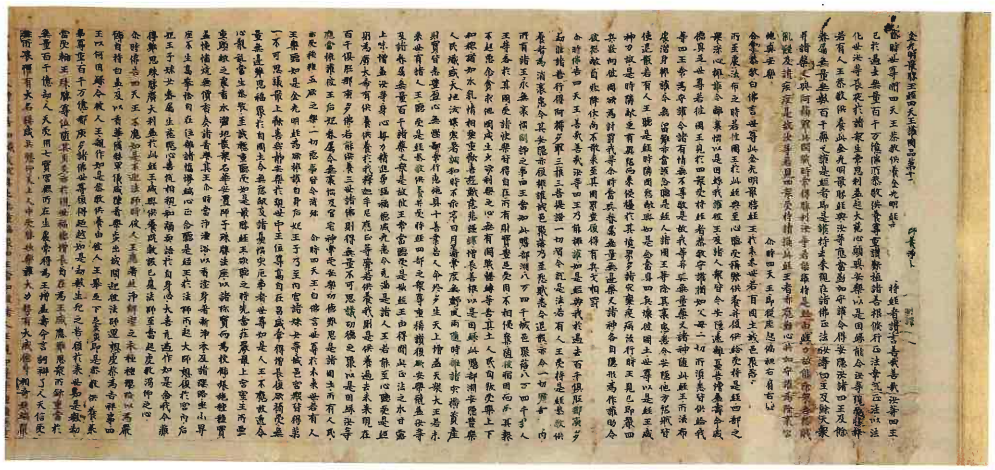
平常展のご案内……2～3
収蔵品の紹介99……4
高野山の古建築 第二十九回……5
高野山の考古学（十七）……6～7
古絵図で巡る高野山探訪（その六）……8～10
高野山霊宝館からのご案内……11
霊宝館の庭園42……12

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！　ホームページ割引券もご利用ください

平成29年度 平常展

「密教の美術～霊宝館収蔵宝物お蔵出し！～」

開催中　平成30年4月8日(日)まで



国宝　細字金光明最勝王経　竜光院

御宮并興山寺総絵図　金剛峯寺

前期：平成29年12月9日(土)～平成30年2月12日（月・振替休）
※終了しました
後期：平成30年2月14日(水)～4月8日(日)

高野山霊宝館は指定品約二万八千点、未指定品約五万点という膨大な収蔵品を有しています。その中には展示の機会が少なく、普段滅多にお目にかけることのない宝物もたくさんあります。本展ではそんなレア収蔵品の中から絵図・工芸品・近代絵画などを中心に、名品・珍品の数々を展示いたします。まだまだほんの一部ですが、高野山に伝わるさまざまな文化財を通して、また違った視点で高野山の歴史に触れていただけましたら幸いです。

主な展示品

■書跡

国　宝	細字金光明最勝王経	竜光院
国　宝	不空羂索神変真言経	三宝院〔後期〕
未指定	細字大般若経	金剛峯寺

■絵画

未指定	御宮并興山寺総絵図　橘保春筆	金剛峯寺
未指定	両界種子曼荼羅図　建部快運筆	金剛峯寺
未指定	石楠花図　丸山晩霞筆	霊宝館
未指定	高野山細見図	霊宝館

未指定　樹下羅漢像　原在中筆　金剛峯寺〔後期〕
未指定　杜董玩古之図　土宜法龍所持　金剛峯寺〔後期〕
未指定　経文阿弥陀像　中村嘉兵衛筆　金剛峯寺〔後期〕

■彫刻

未指定　厨子入両頭愛染明王像　金剛峯寺
未指定　護摩灰御手形弁才天十五童子像　親王院

■工芸

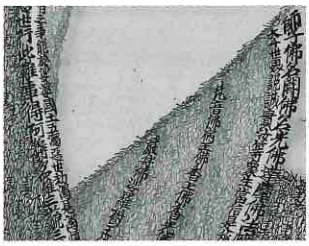
県指定　高野版木製活字　西禅院
未指定　能面（笑尉・中将・万眉・小飛出）　金剛峯寺　※初出陳
未指定　狂言面　見徳〔賢徳〕　金剛峯寺　※初出陳
未指定　釣灯籠（三基）　金剛峯寺　※初出陳
未指定　粒粒羅漢念珠　戸田忠真奉納　金剛峯寺
未指定　太鼓・台・撥　黒田直方奉納　金剛峯寺
未指定　水晶玉木彫台御棚飾　津田長一作　金剛峯寺

同時開催

特集展示　「弘法大師の書（複製展示）」
「外国貨幣（賽銭）に見る高野山参拝者の国際性～伽藍編」
常設展　重文　深沙大将立像・執金剛神立像
重文　四天王立像のうち多聞天立像・広目天立像
（持国天立像・増長天立像は春頃修理完了予定です）
以上快慶作、金剛峯寺蔵
ほか展示
◎文化財の保存上、展示品が変更される場合があります。

樹下羅漢像　金剛峯寺

経文阿弥陀像　金剛峯寺


経文阿弥陀像　手首部分拡大

初公開　能面・狂言面　金剛峯寺

能面 万眉

能面 中将

能面 笑尉

全て室町時代の作とみられる貴重な面です。

狂言面 見徳〔賢徳〕

能面 小飛出

平成30年度春期企画展「室町時代の高野山」

平成30年4月14日(土)～7月8日(日)

主な展示品（予定）

重文　高麗版一切経　金剛峯寺
重文　厨子入金銅水神像　金剛峯寺

初公開〔特別展示〕

仏涅槃図（愛知県立芸術大学による、金剛峯寺本〔国宝〕の模写）　金剛峯寺

収蔵品の紹介 99

釣灯籠〈六角〉一基

鉄製　桃山時代　慶長三年（一五九八）　金剛峯寺蔵

高さ三〇・〇cm　笠直径三三・〇cm

二人の戒名が刻まれています。

高野山に来られたことのある方なら、奥之院の御廟にお参りする前に入る燈籠堂で、ずらりとひしめく灯籠に圧倒された方も多いかと思います。堂内外陣や天井では納まりきらず、地下や回廊上部の軒下、近年増築された第二燈籠堂の中にも無数の灯籠が安置されています。これらは釣灯籠と呼ばれるタイプのもので、かつては中に油を入れた皿やろうそくを置いて使用しました。現在は一部の灯籠を除いてLED電球を使用しています。

燈籠堂は古くは拝殿や礼殿と呼ばれ、弘法大師の甥の真然大徳（？～八九一）の創建、祈親上人（持経上人）定誉（九五八～一〇四七）の再興とされます。祈親上人が荒廃していた高野山の復興を願って献じた祈親灯（別名・貧女の一灯）、白河法皇による白河灯、昭和天皇による昭和灯二基の計四基は「消えずの灯」として今も火種を絶やすことなく堂内で燃え続けています。その、千年にわたる長い間には身分を問わず、数多くの人々によって灯明や灯籠が奉納され、毎年四月二十一日と十月一～三日にはそれらの灯籠を供養する「奥之院萬燈会」が行われます。そのような釣灯籠のうち現存するものの中で古く、銘があるものを中心に十二基が、大正十一年（一九二二）に霊宝館に収蔵・保管されています。

今回紹介するのはそのうちの一基で、経年劣化で吊り下げる部分や脚などに欠損がみられますが、火袋には桐紋の透かし彫りが施されているのがわかります。六角形の灯籠の柱部分には銘文が刻まれており、「後生前所／常燈大施主／尾張国智多／郡朝日之庄／康徳寺殿松屋妙貞／善福寺殿貞菴道松／慶長三戊戌年／十一月十一日／取次千手院文殊院／現世安穏」と記されています。康徳寺殿松屋妙貞は朝日殿（？～一五九八）と呼ばれる女性、善福寺殿貞菴道松はその夫の杉原定利（？～一五九三）の戒名で、二人は豊臣秀吉の正室おね（北政所、高台院）の実の両親にあたります。おねは浅野家の養女となったのち、秀吉と結婚しています。朝日殿は秀吉が亡くなる一週間前の、慶長三年八月十一日に亡くなっているので、同年十一月十一日に奉納されたこの釣灯籠は生前の朝日殿が奉納を準備していたのか、あるいは豊臣家の家紋が使用されていることから娘のおねが奉納に関わった可能性が挙げられます。灯籠の柱が一本欠けている部分（火を入れるために当初からありません）の両側に刻まれた「現世安穏・後生前所」という文言は、この世では穏やかに過ごし、あの世では極楽に行けることを願う言葉で、ただし一般的には「後生善処」と書きます。

奥之院燈籠堂は文禄五年（一五九六）に焼失、再建は慶長（一五九六～一六一五）の初めに行われたようですが詳細ははっきりしません。本灯籠が奉納された頃には再建されていたのでしょうか。この頃は火災や地震などでダメージを受けた高野山を豊臣家が復興していた時期にあたり、高野山と豊臣家のつながりを示す遺品の一つと言えるでしょう。

（福形安希子）

連載

高野山の古建築

第二十九回 金剛三昧院多宝塔

鳴海 祥博

上層の詳細　上層は円形で、その上に四角の屋根を架けるのは至難の業だ。軒を支える組物は巧妙に造られている。

多宝塔の全景　高野山の冬は厳しい。多宝塔は795年間、その厳しい冬を耐え抜いて今も建ち続ける。

下層の軒の詳細　垂木の配置をよく見ると、その間隔はかなりバラバラだ。技術的には未熟ともいえるが、苦労の跡が伝わってくる。

多宝塔の内部　塔内の中央に金色まぶしい金剛界の五智如来坐像が祀られている。周囲一面に施された彩色が今も鮮やかに残る。

金剛三昧院の正門を入ると左側に国宝の多宝塔があります。この塔は、貞応二年（一二二三）に鎌倉三代将軍実朝の菩提を弔うために建てられた、高野山内そして和歌山県内で最古の建物です。

多宝塔は、正方形の一階部分に円形の二階を重ね、四角い屋根を乗せた形式の二重の塔で、密教独特の形式とされています。多宝塔は密教世界の中心である大日如来を象徴するとされていますが、高野山では特定の人の菩提を弔うためにも建てられました。金剛三昧院多宝塔は実朝の供養塔として建てられたのです。

実朝が亡くなって三十年近くたった宝治二年（一二四八）に書かれた『大井太郎朝光寄進状』という文書が金剛三昧院に残っています。そこには、「故右大臣（実朝）のために建立した御塔一基」は「大貳尼の宿願」であったこと、その塔の維持費として「地頭職」を寄進すること、そして先に「塔造営の奉行を任せられたことは本望」であったなどと記されています。

この文書に記された「御塔一基」こそ現在残る金剛三昧院多宝塔なのです。

大井太郎朝光は長野県の佐久地方を支配していた鎌倉幕府御家人の武士で、多宝塔の建立に直接関わった人物だったのです。塔の造営責任者として、長野から遠く離れた高野山に滞在していたに違いないと思えるのです。

そして実朝菩提の多宝塔は「大貳尼」という実朝の養母が願主だったのです。大貳尼は源頼朝と北条政子の信頼が厚く、二代将軍頼家と三代実朝の養育係となった女性です。朝光は大貳尼の甥でした。

朝光の寄進した地頭職は、承久の乱の際に恩賞として与えられたものだったのです。朝光はその恩賞を主君実朝の菩提のために寄進したのです。

金剛三昧院多宝塔は心地よい安定感を感じさせ、檜の皮で葺かれた屋根は軒の反りや屋根の曲線に柔らかに対応し、とても優美です。

しかしこの塔の屋根は、最初に建てられた時には檜皮葺ではなく、板葺でした。厚さ三cm程の厚板を十八cmピッチで重ねて葺かれていました。その実物が屋根裏に残っています。優雅に見える多宝塔は、かつては鎧をまとったような無骨な姿だったようです。でもそれは武士の棟梁実朝にふさわしい姿だったのかもしれません。

近づいてみると赤色、黄色、白色の塗装が残っています。建てられた当時は周囲の緑の中で定めし鮮やかだったことでしょう。今は風雨に晒された木肌が八百年近くの歳月を感じさせます。

塔内には重要文化財に指定されている金剛界の五智如来坐像五軀が安置され、周囲は一面に華麗な宝相華紋の彩色で埋め尽くされ、その色鮮やかな様子には目を奪われます。まさに仏の世界です。

高野山の考古学（十七）

小仏塔の世界⑥

―一石五輪塔の語り（前編）―

公益財団法人 元興寺文化財研究所
狭川 真一

今回はこのシリーズの八回目（『霊宝館だより116号』掲載）でご紹介した一石五輪塔について解説します。一石五輪塔は高野山の中で、おそらく最も数多く作られた石塔と思われ、その用途は主に納骨に伴うものであることを前回に紹介しました。そこで今回は、一石五輪塔の形の特徴について考えてみたいと思います。

貝塚市半田墓地の一石五輪塔

一石五輪塔の登場とその意味

一石五輪塔とはその名前のとおり、一つの石材を刻んで作った五輪塔のことですが、中世後期に大量に作られた小型のものを指して、このように呼んでいます。現在知られている最古の資料は、大阪府貝塚市半田墓地にある応永六年（一三九九）銘のものです。頂部の空風輪を失っていますが、部品が分かれないだけで、通常の組合式五輪塔と何ら変わらない形をしています。つまり、組合式五輪塔の問題点を解消した実用新案の五輪塔だったのです。それは、転倒しても部品がバラバラにならない点が好評だったのだろうと思います。たとえば、墓所の中を小動物が走り回ると転倒、倒壊しますし、近在の樹木が倒れてきても同様な被害が出ます。常に管理されているなら、すぐにでも元に戻せるでしょうが、膨大な数の石塔の管理は至難の業だと想像されます。中世の組合式五輪塔は、現在も無縁墓地などで多数見受けることができますが、当初の組合せが分からなくなり、適当に寄せ集めたものがほとんどです。これに対して一石で作られた場合、まったくこの心配がありません。もう一つ考えられることは、墓石屋さんから墓所まで運ぶ場合、小型で一体化したものであれば、一人でも容易に運ぶことが可能となり、組合せ方や方向を間違う心配もありません。

こうした理由から、一気に流行したとみられます。近畿地方では、登場してから江戸時代初期までの三〇〇年間前後が、造営の中心時期だったとみられます。

高野山最古の一石五輪塔

では、高野山に登場するのはいつ頃からでしょうか。高野山の一石五輪塔については、高野山大学図書館の木下浩良さんの研究によって多くのことが分かってきました。ここでは木下さんの研究を参考にして、要点を整理してみます。

まず最古の資料は、永享十年（一四三八）銘のもので、貝塚市半田墓地の資料よりも遅れること約四〇年の造営です。しかも形がまったく異なるもので、安定的な形で地面に安置する形の半田墓地の塔にく

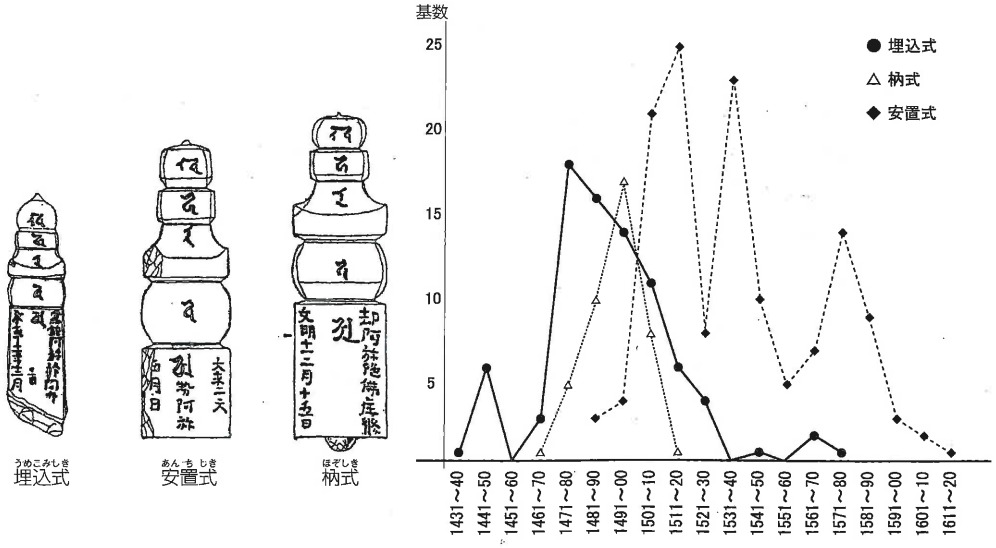
らべ、下端部が尖っており、地面に埋め込む目的で作られたことは明らかです。しかも続いて造立される一石五輪塔の多くは、緑泥片岩を使ったやや扁平なものが中心になります。これが木製の卒塔婆から転じたものであろうことは容易に想像されるところです。高野山の古い絵図には背の高い木製とみられる卒塔婆が、奥之院の参道沿いに多数建てられている姿が描かれています。しかし、そのような大きなものではなく、一石五輪塔と同じようなサイズのものが存在したのだろうと思われます。残念ながら、高野山では未だ実物の発見はありませんので、確かな由来を探るのは今後の課題です。

さて、高野山に一石五輪塔が登場してからしばらくは通常の組合式五輪塔も建てられていたようですが、両者が一緒に作られた時期は短く、一石五輪塔が組合式五輪塔に代わってその役割を果たしていくことになったようです。

その後、貝塚市にあったような通常の五輪塔に近い形で、安置するタイプの一石五輪塔も高野山に登場してくるようになります。これがおそらく組合式五輪塔の役割を純粋に引き継ぐ塔だと思われます。木下さんの研究によると、その登場の時間差はおよそ三〇年です。その後、両方のタイプの一石五輪塔は同時に存在しますが、安置式が優勢になり、埋込式は少し早く姿を消してしまいます。

両者はいまのところ同じ用途に利用されたと考えていますが、その出現時のモデルが異なると思われますので、あるいは元々は用途が異なっていたのかも知れません。と言いますのも、埋込式の一石五輪塔は高野山以外ではほとんど見つかっていないのです。つまり、高野山特有の一石五輪塔と言えるのです。少なくとも出現した当初の頃は、特別な役割を担っていた可能性が推定できるのです。この問題も、将来の研究課題です。

高野山の埋込式一石五輪塔（高野山霊宝館蔵）



木下浩良氏作成の一石五輪塔タイプ別盛衰表

納式は安置式に台座を伴うタイプであり、簡略化されて安置式になったと思われるので、ここでは安置式に含めて捉えています。

【参考文献】
木下浩良　一九八五「高野山最古の在銘一石五輪塔」『史迹と美術』第五五七号、二〇一七「再び高野山最古の在銘一石五輪塔について」『史迹と美術』第八七五号
狭川真一　二〇一四「高野山奥之院の納骨信仰」『考古学雑誌』第九八巻第二号

「古絵図で巡る高野山探訪」（その六）

湯屋

図1 『高野山内図』（正保3年〈1647〉 金剛峯寺）に記された谷々の湯屋 ○印は湯屋

湯屋の歴史

日本での入浴の歴史は、仏教の伝来と同じ頃、寺院に「浴堂」が設けられ、奈良時代には、重要な法会の前に僧侶らが身体を洗い清めていたのが始まりと考えられています。その後、教化の一環として、庶民を入浴させ、普及していったと考えられています。

また、その方法は時代とともに移り変わります。当初は室内を蒸気で満たす蒸し風呂、そして湯船に浸かるのではなく、湯船の周囲にスノコなどを設置して身体に湯をかける沐浴でしたが、その後、湯船に浸かるようになり、現在のような入浴方法になったと考えられています。

そのような湯屋の建造物を知る資料として、東大寺（奈良県奈良市）の「重文 大湯屋」（参考1）とその内部にある「鉄湯船」（参考2）などは、その様子を窺うことができます。

高野山の湯屋

高野山内には、十の谷があり、かつて谷々に「湯屋」がありました。

現在、高野山には湯屋に関する建造物や湯釜などの施設は伝わっていませんが、いくつかの古絵図には、「湯屋」、「湯屋屋敷」、「湯屋跡」、「湯屋之池」（水源地）といった表記が見られ、山内の各所に湯屋の存在が窺えます。

その一つの一心院谷の湯屋について見ますと、『高野山内図』（正保三年〈一六四七〉金剛峯寺蔵 図1・2）にはその位置、『高野山通念集』（十七世紀 図3）ではその建造物が切妻造で描写され、その様子を知ることができます。この場所は、現在西室院の境内に当たります。

入浴は、古くから高野山の僧侶の生活、特に修行において、非常に大切な事柄となっており、得度式（剃髪式）や、受戒を受ける当日の朝には、湯船の湯水に丁子を入れた「丁子湯」に浸かり、身を清めてから式に臨みます。

文献にみる高野山の湯屋

『浴室帝釜之縁起』（江戸時代　慶安四年〈一六五一〉　金剛峯寺蔵図4・5）には、高野山十谷の一つである一心院谷の湯屋開設について記されています。この湯屋は、行勝上人（一一三〇～一二一七）によって造営され、上人没後は、命日である五月七日にちなみ、正月七日、

図2　一心院谷湯屋『高野山内図』（部分）　※ 不動堂は現在伽藍に移築

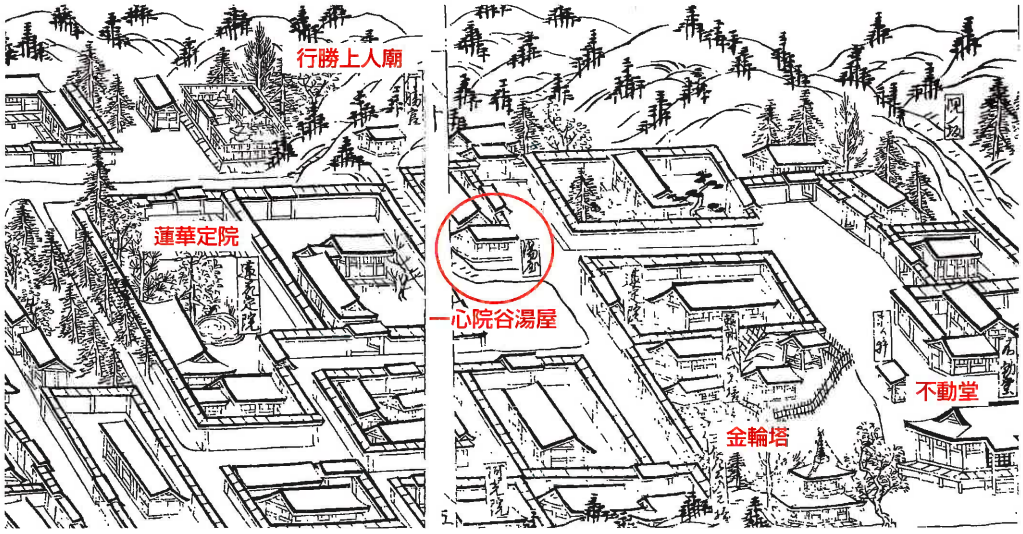


図3　『高野山通念集』（17世紀）にみる一心院谷湯屋

参考2　俊乗坊重源上人により建久8年（1197）に鋳造された「鉄湯船」別の釜で温めた湯を入れ、蒸気を利用して垢を落とし、沐浴のように湯をかけていたと考えられています。直径2.3m　深さ0.73m

参考1　「重文 大湯屋」延応元年（1239）　奈良市・東大寺

五月七日、毎月十五日に湯を沸かして沐浴、垢を落とし、身を清めていました。とりわけ、正月七日と五月七日の日には、上人（の像）に沐浴していただく儀式があったそうです。しかし、時代が移り、江戸時代には浴室はあるが、釜はないという状況であったといいます。この状況を嘆いた僧たちが上人の行跡を称える意味を込めて、新たに湯釜を造営しました。この造営の功を慰労して毎年二回、春季と秋季の彼岸に湯を沸かしたといいます。

巻末を見ると、蓮華定院・万智院・金光院・蓮定院・真蔵院・華屋院・寶壽院などといった子院（塔頭）の二十四名の僧侶が施主となり、一心院谷の湯屋を運営していたことがわかります（図5）。恐らく、他の谷々にある湯屋も一心院谷の湯屋と同じように、谷内の複数の子院により、共同運営されていたものと考えられます。

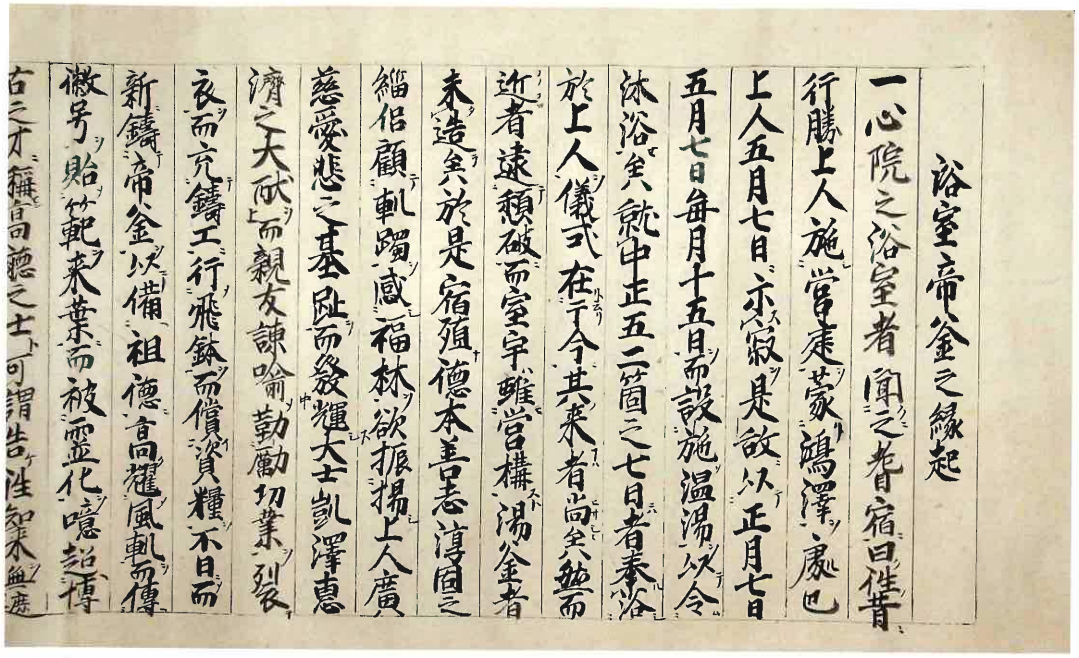

浴室帝釜之縁起
一心院之浴室者聞之者宿日徙昔
行勝上人施営建蒙鴻澤處也
上人五月七日示寂是故以正月七日
五月七日毎月十五日設施温湯以令
沐浴矣就中正五二箇之七日者奉浴
於上人儀式在于今其来者尚矣然而
近者逮頽破而室宇雖営構湯釜者
未造矣於是宿殖德本善志淳風之
緇侶顧軌躅感福林欲振揚上人廣
慈愛悲之基趾而發願大士凱澤恵
濟之大猷而親友諫喻勤勵功業裂
衣而充鑄工行飛鉢而償資糧不日而
新鑄帝釜以備祖德高躅風軌而傳
徽号貽範来葉而被霊化噫超博
古之才稱高德之士可謂告性架木無疲

図4　『浴室帝釜之縁起』（巻頭）慶安4年（1651）　金剛峯寺

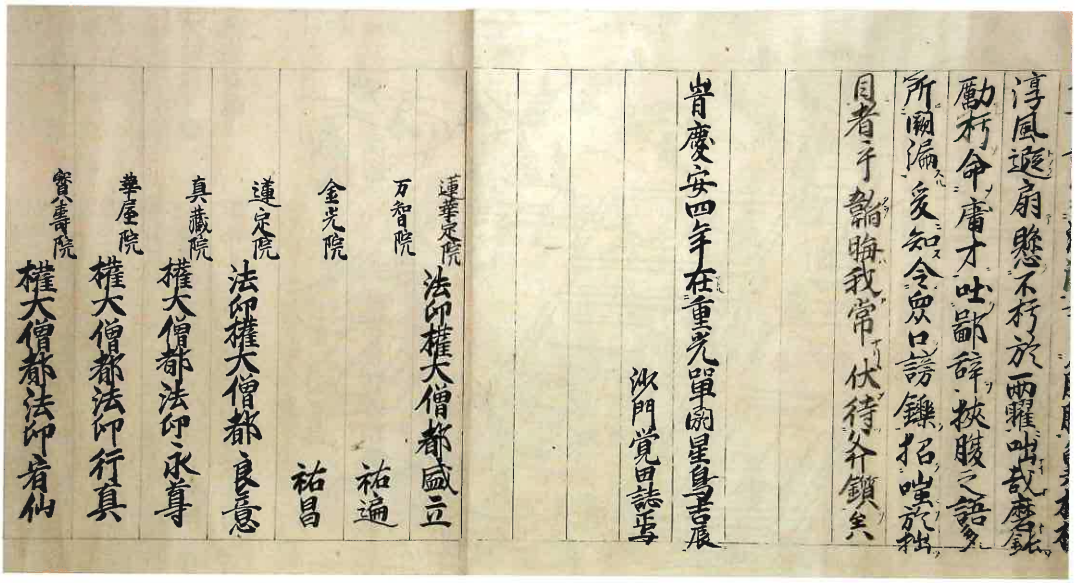

淳風遐扇懸不行於兩羅咄哉磨鈍
勵行命庸才吐鄙辞挾腋之語
所願偏受知令衆口誘鏹招嗤於世
目者予謝悔我常伏待斧鎮矣
肖慶安四年在重光單閼星身春辰
泳門覚田誌写
蓮華定院　法印權大僧都盛立
万智院　祐遍
金光院　祐昌
蓮定院　法印權大僧都良意
真蔵院　權大僧都法印永尊
華屋院　權大僧都法印行真
寶壽院　權大僧都法印有仙

図5　『浴室帝釜之縁起』（文末）

日本人は、世界でも有数の風呂好きな国民ですが、特に冬の寒い季節の入浴は、一日の疲れを取り、明日への活力をもたらしてくれます。映画やテレビの入浴シーンを見ていると、俳優や番組レポーターは、決まって「極楽。極楽。」と言っている光景を目にします。風呂は、仏教に由来し、入浴するとあたかも仏様に抱かれているように、リラックスした気持ちになりますので、自然と口から出てくる言葉なのかもしれません。

特に、高野山の冬は極寒であるため、今も昔も入浴は厳しい修行で冷え切った僧侶たちの身体を温め、束の間の憩いの時であることには変わりはありません。

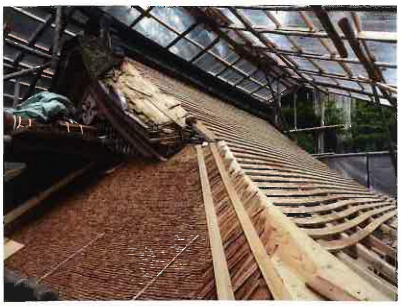
（鳥羽正剛　研谷昌志）

高野山霊宝館からのお知らせ

各種イベント報告

◎平成29年度 重要文化財（建造物）上杉謙信霊屋保存修理 屋根檜皮葺き替え見学会

・平成29年10月7日㈯


葺替中の上杉謙信霊屋

22年ぶりの檜皮屋根葺き替え作業のようすを、（公財）和歌山県文化財センターの結城啓司氏による特別解説も交えご紹介しました。

◎ミュージアム法話

・10月7日㈯
富田向真師（高野山高校教諭）

ミュージアム法話のようす

・10月14日㈯
中原慈良師（高野山補陀落院徒弟）

・11月18日㈯
永田道範師（奈良・寶國寺）

・11月23日㈭・㈷
神保博舟師（兵庫・法心寺）

お坊さんの法話を通して文化財を紹介し、多くの方のご好評をいただきました。

◎高野山霊宝館友の会文化講座「平家物語の時代と高野山 ～平家物語ゆかりの地を歩く～」

・平成29年10月22日㈰

友の会文化講座

台風21号の影響により散策は中止となり、当館迎賓館において高野山大学名誉教授 山陰加春夫氏による講座と、大宝蔵展の展示解説を聞きながらの見学会を行いました。悪天候の中、足を運んで下さった参加者のみなさまは物語の時代に思いを馳せておられる様子でした。

◎国宝（建造物）金剛峯寺不動堂特別公開・ご本尊ご開帳

・平成29年11月21日㈫～23日㈭・㈷

不動堂　結城氏（右）による解説

不動堂内部

大宝蔵展での元本尊・不動明王坐像（重文）展示に合わせて、2年ぶりの内部公開。現在のご本尊は平櫛田中（ひらくしでんちゅう）作の不動明王像です。

21・23の両日には不動堂の防火設備（ドレンチャー）の実演を、23日には（公財）和歌山県文化財センターの結城氏による解説も行われました。

◎ミュージアムトーク

・11月3日㈮・㈷
〔金剛峯寺「六波羅蜜」イベントの一環として開催〕

・11月23日㈭・㈷
担当学芸員による、第38回大宝蔵展「高野山の名宝」平家物語の時代と高野山 の展示解説を行いました。参加者は熱心に聞き入っておられました。

◎宝物貸出情報

〇九州国立博物館
特別展「王羲之と日本の書」
平成30年2月10日㈯～4月8日㈰
国宝 聾瞽指帰（弘法大師空海筆）
下巻 金剛峯寺蔵
〔2／10～3／11展示〕

〔報告〕
〇徳島県立文学書道館
文学特別展「高村薫の見た空海」
平成29年12月16日㈯～
平成30年2月8日㈭
聾瞽指帰（弘法大師空海筆）複製
灌頂暦名写　以上金剛峯寺蔵
版本高野大師行状図画
虚空蔵菩薩像　以上宝寿院蔵

◎友の会会員募集

・会員証提示で会員本人のほか同伴者3名様まで霊宝館と金堂・大塔の拝観無料
・年4回発行の機関誌「霊宝館だより」送付

〈年会費〉
一般会員（個人）　3、000円
賛助会員（法人）　30、000円
皆様のご入会をお待ちしております。

お問い合せ先　高野山霊宝館　TEL 0736―56―2029㈹

霊宝館の庭園 42

マンサク・満作 ときしらず・時不知

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

マンサクはマンサク科・マンサク属の落葉低木とされていますが樹高が十メートル余の個体もあるそうです。高野山塊では山頂部の日当たりのよい乾いた小尾根、斜面、崖地などに自生していますが、個体数の多い樹ではありません。

マンサクという和名の命名由来については、この樹の比較的、細長く延び広がる枝に咲く黄金色の花々を、よく稔った稲穂に見立てての満作・万作という説と、早春の山野において、他の樹に先立って「先ず咲く」という説があります。どちらかというと後者が多くの人に支持されているようですが、字は満作・万作を慣用しています。

この樹には、ときしらず（時不知）という方言名もあるほどに、辺りは冬枯れ、高野山では、その後も何度か降雪もあるという時候に開花します。が、時知らずではなく、時候知らず、ではと思っています。

「日本主要樹木名方言集」・倉田悟著には、この樹の方言名が、ときしらずを除いて四十一記載されています。地方によっては里山などに多く自生していたようで、ガマズミなどと同様、ねじき、ねじりぎ、ねそ、ねそのき等、幹や枝が種々の結束用材として使われていたことを知ることができます。

なお、同書には、まんさくという方言名で呼ばれている樹では、クスノキ科・クロモジ属のダンコウバイ・和歌山（伊都）と同科同属のクロモジ・群馬（勢多）が、あげられています。

古書などではマンサクに金縷梅の字が当てられていることがあります。植物関係書でも、昭和八年発行・寺崎留吉の大著・「日本植物図譜」では、マンサク科を金縷梅科と表記されています。

金縷（金色の撚り糸）は、この樹の花の花弁の色と形による当字といいます。

マンサクの花の満開時は遠目には黄金色に見えますが、近くで、よく観ると、四枚（本）の黄色い花弁と内側が暗紫色の四枚の萼と四つの点状の雄ずいが観られます。花弁の形は自然のつくりだす造形の妙というか、奇態です。

その花弁の形を、人によって、金縷の他、線形、長く紐のような、切れ切れの糸くずみたいな、黄色でリボン状、リボンのように細長く、クラゲの脚のような等と表記されています。

高野山に自生する樹のうち、今年も、やっと春が来たなということを、先ず実感させてくれるマンサクの開花も、もう直ぐです。

早春の花枝

秋の葉枝